

しもふこう ずしょう じいせき
下深水小路遺跡

村営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

下深水小路遺跡

村営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2023

中津市教育委員会

2023

中津市教育委員会

序

市町村合併前の旧三光村は旧中津市に隣接し、中津市のベッドタウンとして僅かながら人口が増加しておりましたが、山間地域に位置する株小学校校区は高齢化と人口減が重なり、子どもの数が減少しております。そこで、若者を呼び込むための住宅として計画されたのが村営住宅でした。そこは、東九州自動車道と中津日田道路という自動車専用道の交差するジャンクションの建設が予定されていた地点にも近く、住宅地としては好立地の場所でした。その造成工事に先立って発掘調査が行われたのが、本書で報告します小路遺跡です。

発掘調査が行われたのは、約25年前の平成9年のことでした。当時文化財担当の手薄であった三光村教育委員会では、大分県教育委員会文化課の全面的な協力を得て、発掘調査を実施することができました。しかしながら、その後長らく整理作業が行われず、報告書が未刊行のままでした。この状態を解消するために、合併後の中津市教育委員会において整理作業を行い、今般報告書の刊行に至った次第です。

長らく未刊行であったことに対し、皆様にお詫びを申し上げるとともに、大分県文化課をはじめ、調査に関わって下さいました方々に対し衷心より感謝申し上げます。

令和5年3月31日

中津市教育委員会
教育長 栗田 英代

例　　言

1. 本書は大分県下毛郡三光村教育委員会（平成17年に中津市に編入合併）が平成9（1997）年度に実施した小路遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は大分県教育委員会文化課の全面的な協力を得て、三光村教育委員会（当時）が行った。
3. 出土遺物の整理作業は、令和4年度に実施した。
4. 遺物の洗浄・注記・実測・拓本・浄書・観察表作成等は整理作業員が行い、旧和田公民館にて保管している。
5. 本書の執筆、編集は小柳和宏（中津市歴史博物館専門員）が行った。

目 次

第1章	はじめ	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	1
第3節	調査体制	1
第2章	遺跡の立地と環境	2
第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	2
第3章	調査の成果	7
第1節	調査概要	7
第2節	基本層序	7
第3節	遺構と遺物	7
第4章	総括	23
写真図版		
報告書抄録		

挿図目次

第1図	周辺の遺跡分布図	3
第2図	詳細遺跡位置図	5
第3図	下深水地区字図	6
第4図	遺構配置図	8
第5図	第1焼土坑	9
第6図	第2焼土坑	9
第7図	礎石および柱穴列	10
第8図	井戸跡	11
第9図	C区SK2、SK3	11
第10図	石垣立面図	12
第11図	下深水小路遺跡ポイント位置図	14
第12図	A区セクション図1	15
第13図	A区セクション図2	16
第14図	A区セクション図3	17
第15図	15層遺物出土状況	18
第16図	A区セクション図4	18
第17図	A、C区エレベーション	19
第18図	出土遺物(1)	20
第19図	出土遺物(2)	21
第20図	出土遺物(3)	22
第21図	周辺遺跡の遺構図	24

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	4
第2表	遺物観察表	26

写真図版目次

写真図版1	A区南半完掘状況（北から） / A区北半の状況 / A区遠景（C区から）	27
写真図版2	A区北半完掘状況（東から） / A区第1焼土坑（北から） / A区第1焼土坑（南から） A区第2焼土坑 / B区礎石列 / A区井戸（半裁状態） / A区井戸 / C区石垣	28
写真図版3	C区石垣 / C区全景 / C区西半部 / A区谷部掘り下げ状況 / A区セクションB A区セクションB / A区セクションA / A区セクションC全体	29
写真図版4	出土遺物(1)	30
写真図版5	出土遺物(2)	31

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

人口減少に対応するため、若者を呼び込む住環境整備の一環として、当時の三光村大字下深水字友岡に村営住宅建設の計画が持ち上がった。周知遺跡ではなかったが、立地から遺跡の可能性が高いと考えられ、平成9年に試掘調査を実施した。その結果、ピットや遺物の出土があったことから、本調査を実施することとなったものである。

第2節 調査の経過

平成9年10月30日 本調査開始、重機によるA区南半表土はぎ

11月4日 作業員による掘り下げ開始

11月14日 A区切り返して、重機による北半表土はぎ

11月20日 重機によるB区表土はぎ、遺構検出作業

11月25日 B区掘り下げ開始

12月9日 調査終了

第3節 調査体制（全て平成9年度の肩書）

調査主体者 三光村教育委員会

調査責任者 花崎貞雄（三光村教育委員会教育長）

調査員 平田由美（三光村教育委員会社会教育課技師）

小柳和宏（大分県教育庁文化課副主幹）

豊田徹士（大分県教育庁文化課嘱託）

令和4年度の整理作業の体制は下記のとおりである。

整理責任者 栗田英代（中津市教育委員会教育長）

整理事務 高崎章子（中津市歴史博物館館長）

花崎 貞（ “ 副館長・文化財係主幹）

潟井直幸（ “ “ 文化財係員）

小柳和宏（ “ 専門員）

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

周防灘に注ぐ二級河川犬丸川は、八面山の南東裾部に源を発し、北流しながら徐々に向きを北西にとり、森山付近で支流と合流して向きを東北に変え、周防灘を目指して流れ下る。途中、森山地区までは幅200～500mほどの谷底平野を形成するが、下深水地区はその谷底平野のやや上流側に位置する。下深水地区は、谷底平野が幅200mほどで、丁度このあたりから平野の幅が広くなるのである。

平野部の東岸、すなわち丘陵の裾部を通る道は、下流側に行くといわゆる日田街道と合流し、坂手隈で下毛原から冲代平野に降り、勅使街道（豊前道）に繋がる。一方、上流側に行くと宇佐市山口で伊吕波川の最上流部とわずかな峠を越えて接続することから、宇佐方面へ行くことができ、さらに屋形川の最上流部とも桜峠を越えて繋がっていることから、耶馬渓や日田方面へも行くことができる。また、下深水地区的背後の山の稜線は、現在の中津市と宇佐市、すなわち下毛郡と宇佐郡の境界をなしており、交通のルートとして使われていたと考えられる。

このように、犬丸川の上流域は宇佐方面や耶馬渓、日田方面とも繋がった要衝とまでは言えないものの、交通ルートとしては重要な位置を占めていたと考えられる。

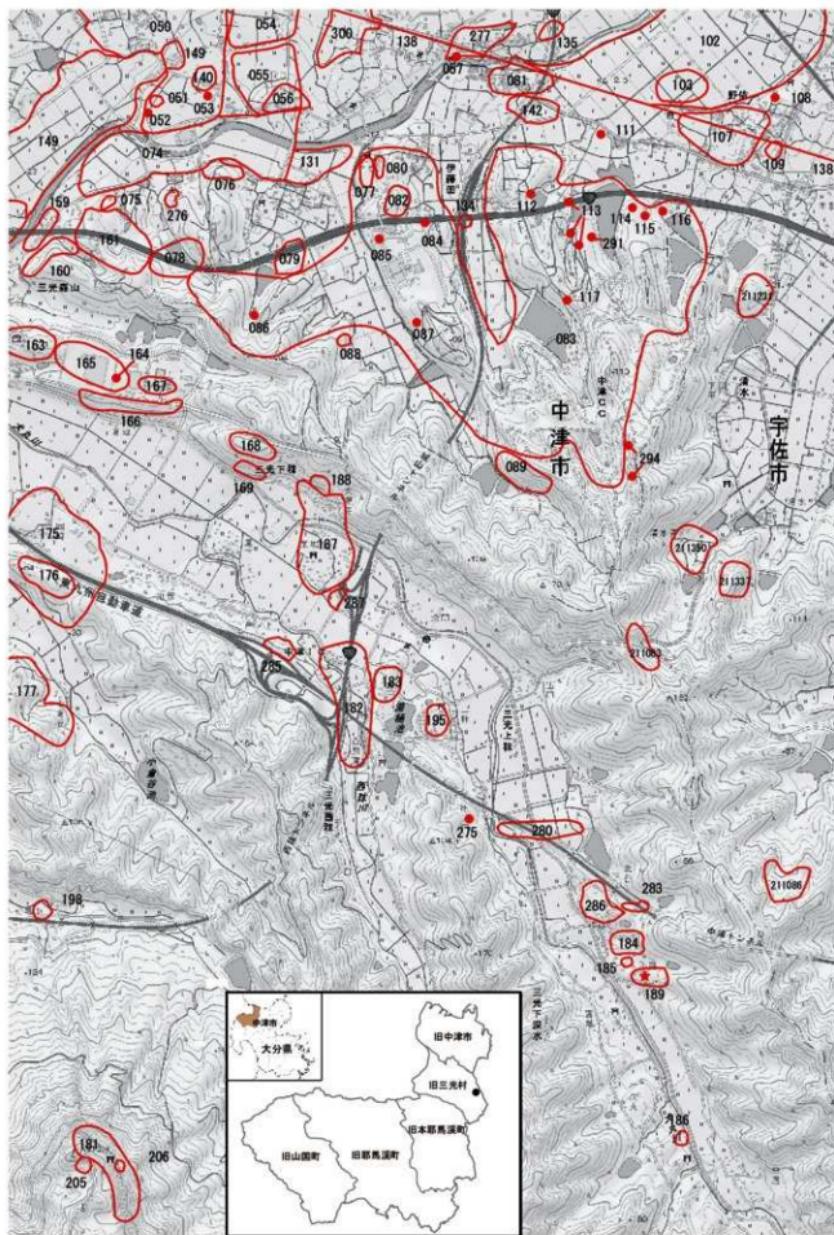
第2節 歴史的環境

この犬丸川流域では、丘陵崖面の凝灰岩に古墳時代後期の横穴墓群が多く穿たれているが、最も上流に位置する天神原横穴墓群（169）でも下深水から約3km下流側に位置しており、古墳時代には下深水周辺に集落は立地していないかったと考えられる。弥生時代以前は散発的に見られるが、犬丸川中流域（森山の丘陵の南側を流れる部分とする）が歴史に登場するのは古代になってからである。それは、犬丸川と犬丸川の支流西株川が合流する部分に挟まれた丘陵の先端に寺院が造られたことである。塔ノ熊鹿寺（183）と呼ばれる8世紀中頃前に創建されたもので、新羅系軒丸瓦や瓦塔などを出土した（三光村1989、中津市2006）。このことは、やはり前述で述べた交通ルートとの関わりで理解すべきものであろう。しかし、古代寺院の例にもれず、その後の展開はこの地では追うことができない。再び下深水地区で遺跡が明瞭になるのは中世である。

鎌倉時代初頭の「宇佐大鏡」には「深水庄 野仲郷内也 田数廿五町七反 根元立券勘文定 佃一丁六反」とされ、頭注で長徳6年（1000）に權大宮司宗海、前播磨掾如海の兩人が宇佐宮御宝前灯油料所として宇佐宮に寄進したものがあることが記されている。宗海は薦社司であったとされ、そこから宇佐宮封戸の野仲郷民を勤員して深水荘の開発に尽力したとされる（『三光村誌』）。この開発は、犬丸川流域の水田化、すなわち井堰構築によるものであるならば、現在の下深水集落のすぐ横にある「庄井手川原」という小字が注意される。ここには「しょんぜ」と地元で呼ばれる井堰がある。「しょんぜ」は「庄井堰」のことと考えられ、右岸下流側を潤す。深水荘の中心的な水田であったのであろうか。

鎌倉時代になると、西遷御家人である宇都宮氏の祖信房の弟興房が建久7年（1196）に「下深水城」を築いて居住したことが「宇都宮系図」に見える。このころ、武士の押領によって深水荘も変質を遂げたと考えられる。

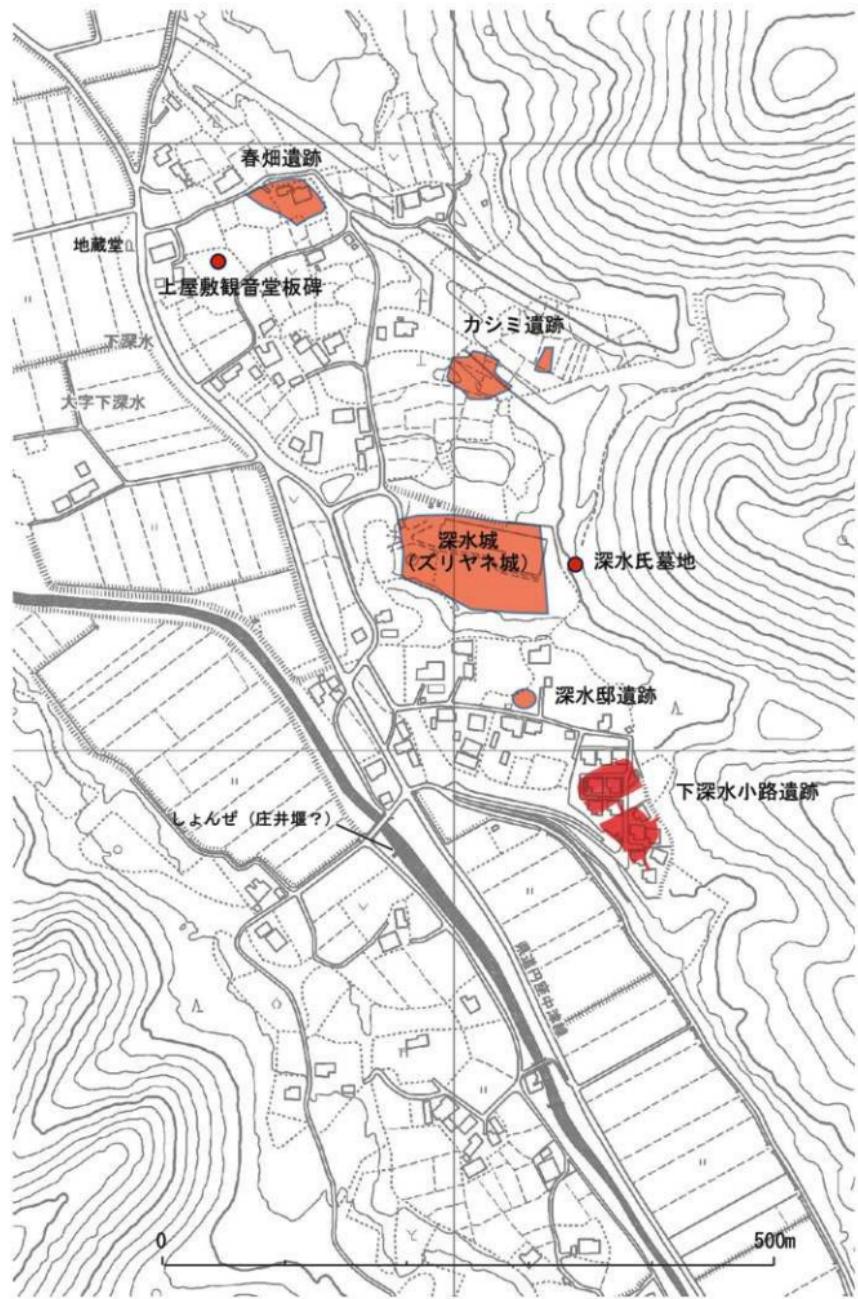
下深水地区では、東九州自動車道建設に伴って、春畑遺跡、カシミ遺跡が調査されており（大分県埋文2014）、さらに以前にはズリヤネ城（深水城）や深水邸埋納遺跡も調査されていた（三光村教委1989）。これらでは、12から13世紀の遺物も出土しているが、中心となるのは14世紀から16世紀であった。本格的な開発が中世後半に行われたことを示唆している。



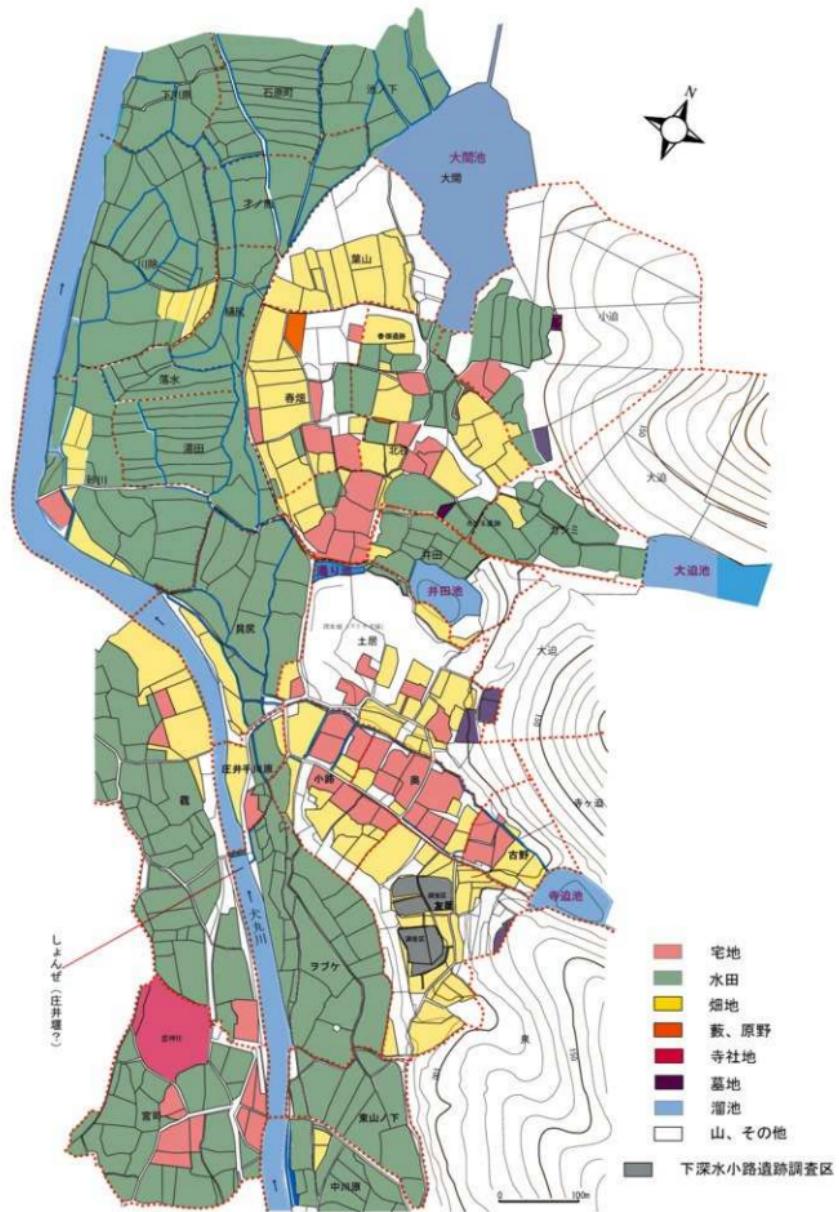
第1図 地図上の遺跡分布図 ($S = 1/25,000$)

第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡番号	名称	所在地	時代
203012	龜山古墳	中津市下池永	古墳
203013	合馬遺跡	中津市合馬	古墳・中世
203017	是則遺跡	中津市是則	弥生・古墳
203019	是則遺跡	中津市定留	古墳
203049	山中城跡	中津市福島	中世
203050	福島遺跡	中津市福島	繩文・弥生・中世
203051	ボウガニ遺跡	中津市福島	繩文・弥生・中世
203054	三保遺跡	中津市福島	弥生・古墳
203055	城土遺跡	中津市福島	中世
203056	下伊賀田城跡	中津市福島	中世
203073	積多田野遺跡	中津市加来	弥生・古墳
203074	大丸山流域遺跡	中津市大丸	弥生～中世
203075	平土横穴墓群	中津市伊藤田	古墳
203076	岩井山横穴墓群	中津市伊藤田	古墳
203077	上伊賀田城跡（草場城跡）	中津市伊藤田	中世
203078	寺泊遺跡	中津市伊藤田	古墳・古代
203079	安平跡	中津市伊藤田	中世
203080	城山横穴墓羣	中津市伊藤田	古墳
203081	伊藤田中遺跡	中津市伊藤田	中世
203082	城山古墳群	中津市伊藤田	古墳
203083	野尻・伊藤田窯跡群	中津市野尻・伊藤田	古墳・古代
203088	才木遺跡	中津市伊藤田	古代
203089	ゴンジ遺跡	中津市伊藤田	繩文・弥生
203131	前田遺跡	中津市伊藤田	中世
203134	伊藤田字梯屋遺跡	中津市伊藤田字梯屋	古墳
203135	馬下遺跡	中津市大字馬下	古代・中世・近世
203140	反屋敷遺跡	中津市福島字反屋敷	中世
203142	屋敷田遺跡	中津市伊藤田	中世
203149	加朱東城跡	中津市加朱・福島	繩文・古墳
203159	椎現島遺跡	中津市三光山	繩文・中世
203160	北平野穴墓群	中津市三光山森山	古墳
203161	森山遺跡	中津市三光山森山	弥生ほか
203163	美濃尾遺跡	中津市三光山下株	中世
203165	倉迫山遺跡	中津市三光山森山	古墳
203166	野辺田横穴墓群	中津市三光山森山	古墳
203167	倉迫二ツ塚古墳	中津市三光山森山	古墳
203168	三ツ塚古墳群	中津市三光山下株	古墳
203169	天神山横穴墓群	中津市三光山下株	古墳
203175	岡崎遺跡	中津市三光同崎	弥生ほか
203176	岡崎城跡	中津市三光田口	中世
203177	田口遺跡	中津市三光田口	弥生・古墳
203181	八面山山頂祭祀遺跡	中津市三光山	古代・中世
203182	香布施遺跡	中津市三光山字幡本	古墳・奈良・平安
203183	塔ノ山病寺・塔ノ熊窓跡	中津市三光西株	奈良・平安
203184	ズリネ城跡	中津市三光下深水	中世
203185	深水部宿納遺跡	中津市三光下深水	南北朝
203186	ここ追遺跡	中津市三光下深水	中世
203187	大源寺遺跡	中津市三光下株	中世
203188	大源寺横穴墓群	中津市三光下株	古墳
203189	下深水小路遺跡	中津市三光下深水	中世
203195	上林城跡	中津市三光上株	中世
203198	大日山周辺遺跡	中津市三光田口	中世
203205	坊住跡	中津市三光田口	中世
203206	南方奥の院石窟	中津市三光田口	中世
203276	小平儀穴墓群	中津市大字福島	古墳
203277	黒川遺跡	中津市大字伊藤田	繩文
203280	池ノ下・能元遺跡	中津市三光下深水池ノ下・上株能元	中世
203283	カシジ遺跡	中津市三光下深水字カシジ・北谷	繩文・中世
203285	西株大追遺跡	中津市三光西株字大追・尾追	中世
203286	春畠・井田遺跡	中津市三光下深水字春畠・井田	中世
203287	候万田遺跡	中津市三光下株字候万田	中世
203300	丁ノ坪遺跡	中津市大字伊藤田字丁ノ坪	中世
211083	上山田横穴墓群	宇佐市清水字上山田	古墳
211086	産山横穴墓群	宇佐市今字産山	古墳
211231	清水城跡	宇佐市清水	中世
211337	清水村山城跡	宇佐市清水	中世
211350	清水寺境内遺跡	宇佐市清水	中世



第2図 詳細遺跡位置図 ($S = 1/4,000$)



第3図 下深水地区字図

第3章 調査の成果

第1節 調査概要

調査は、谷地形のA区、その南側で一段高いB区、そして北側に位置する最も高いC区において行った。A区は現表土を除去したところ、中央付近において黒色土が帯状に半円を描くように堆積しているのが確認できた。当初は大きな遺構と考えたが、確認のため東西方向にトレンチを入れ、堆積状況を確認したところ、谷状になっていたところを埋めた土壌であることが確認できた。そのため、調査では谷を埋めた時期、その後平坦になった谷部をいつどのように活用したのか、という点に注意して調査を行った。その結果、谷部は大きく2回にわたって造成されていたことがわかった。1回目の埋土の中に、置かれたように14世紀の瓦器塊が出土していたことから、1回目は14世紀と考えた。2回目は、整地土中から良好な遺物が出土しておらず、時期はわからなかつたが、整地土には、焼土坑が掘り込まれており、15世紀代と考えられる土器が出土したことから、それ以前に2回目の整地が行われたことがわかる。つまり、14世紀から15世紀の間に、谷を埋め、平坦面を作り出す造成工事を2回行っていたことが明らかになった。しかしながら、1回目については調査の限界があり、造成面での遺構の確認はできなかつた。A区は最終的には約35m四方の平坦地となり、明治中期には畠地として利用されていた。

B区はA区に比べ、約1.1m高く、幅は最大で8mほどと狭い平坦面であるが、ここからは礫石、および礫石の抜き取り痕が7個直線上で確認できた。しかし、谷部を南北に拡張した際に北側は削られており、建物の規模は確認できなかつた。

C区は、明治中期の地籍図では3筆に分かれていた部分で、調査前には中央に南北方向の道が通っていた。ここでは、ピットや土坑、溝が確認されたが、有意な遺構は確認されなかつたが、遺物はA区と同時期のものが出土しており、A区と同時期に何らかの利用をされたものと考えられた。

第2節 基本層序

当初の土層が最もよく残存していると思われるA区セクションDの南端（第14図上段）を見ると、上層から①黒色を呈する現表土、②暗茶褐色土、③茶褐色土、④暗茶褐色土、⑤茶褐色土（強粘質）の順に堆積している。①層は谷部（A区の平坦面）にも続くが、②層以下は平坦面の拡幅に伴い、A区平坦面には及んでいない。

第3節 遺構と遺物

遺構はA、B、Cの各区で確認された。時間的制約から十分な調査が行われたとは言い難いので、主要な遺構のみを以下では説明する。

第1焼土坑（第5図）

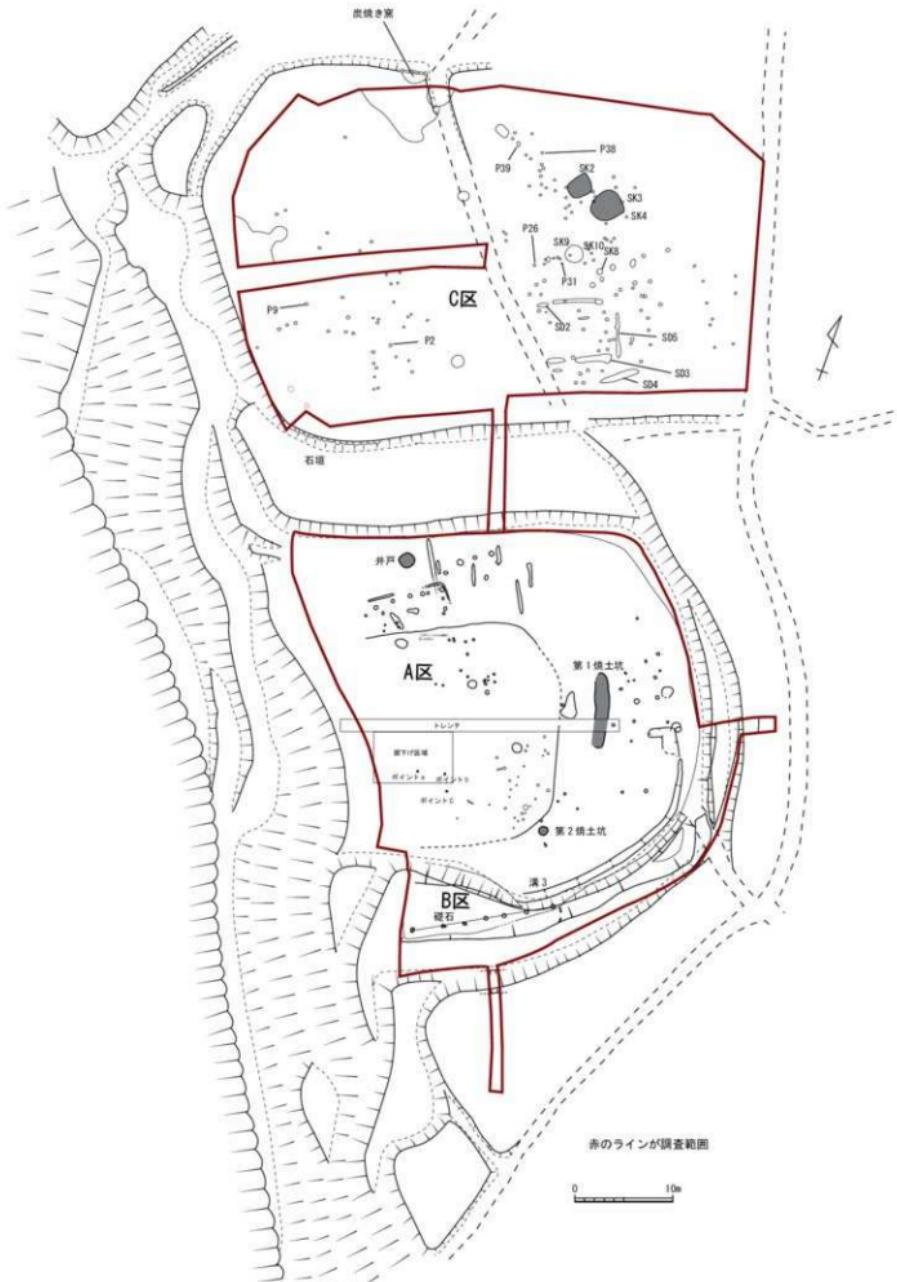
A区の中央やや東寄りで確認された大型の焼土坑である。南側はトレンチの掘削と、削平により明確ではないが、最大幅1.1mで、長さは4.7m+αである。深さは残りの良い南側で0.3mである。壁や床面は被熱のために赤化しているような状況は見られなかつた。土層断面でわかるように、ほぼ上面を覆っている1層からは焼土塊とともに土器片が多く出土している。

出土遺物は第18図Iから18である。Iは白磁の破片で、ヘラによると思われる横線が入る。2から7は土師器壺で、口径はいずれも復元で10～12cmと小さく、器高も低い特徴を持つ。8から12は土師器小皿で、口径はいずれも復元で6cm代である。口縁部を小さく摘み上げるように作る。13から18は焼土塊で、ほとんどが一面に平滑な表面を有している。

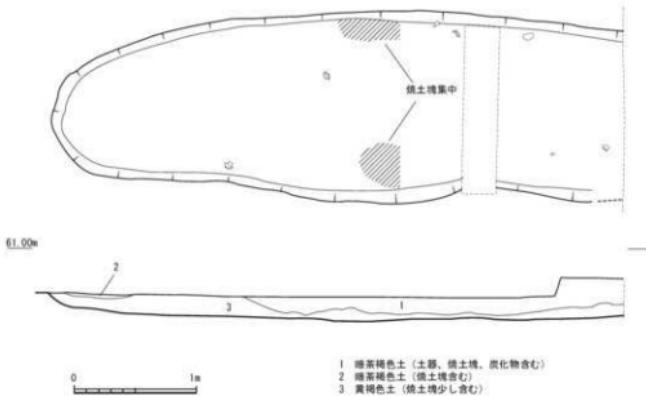
出土遺物から、この焼土坑は15世紀代のものであると考えられる。

第2焼土坑（第6図）

A区の南寄りで確認された円形の焼土坑である。長径0.95m、短径0.8mの梢円形で、残存する深さは0.25mである。壁面は被熱で硬化し、還元状態を呈していた。床面は顕著な被熱の痕跡はなかつた。床面には、炭化物を含む土層が堆積していた。遺物の出土はなく、性格や時期は不明である。



第4図 遺構配置図 (S=1/500)



第5図 第1焼土坑 ($S=1/40$)

礎石・柱穴列 (第7図)

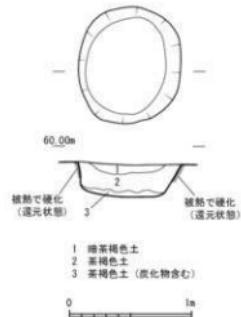
B区にある礎石と柱穴からなる一直線の遺構である。その内礎石は4つで、他は礎石を抜いたと考えられるピットである。それぞれの間隔は中央の5つ(4間分)が2.0~2.2m、両端が2.9m(東側)と3.4m(西側)と幅が広い。現状で地面が北側に緩やかに傾斜している(後世の削平)ことから梁行方向の礎石ないし柱穴は確認できなかつたが、おそらく、この礎石・柱穴列は何らかの建物を構成するものであろう。

これに伴う遺物の出土はなかつた。

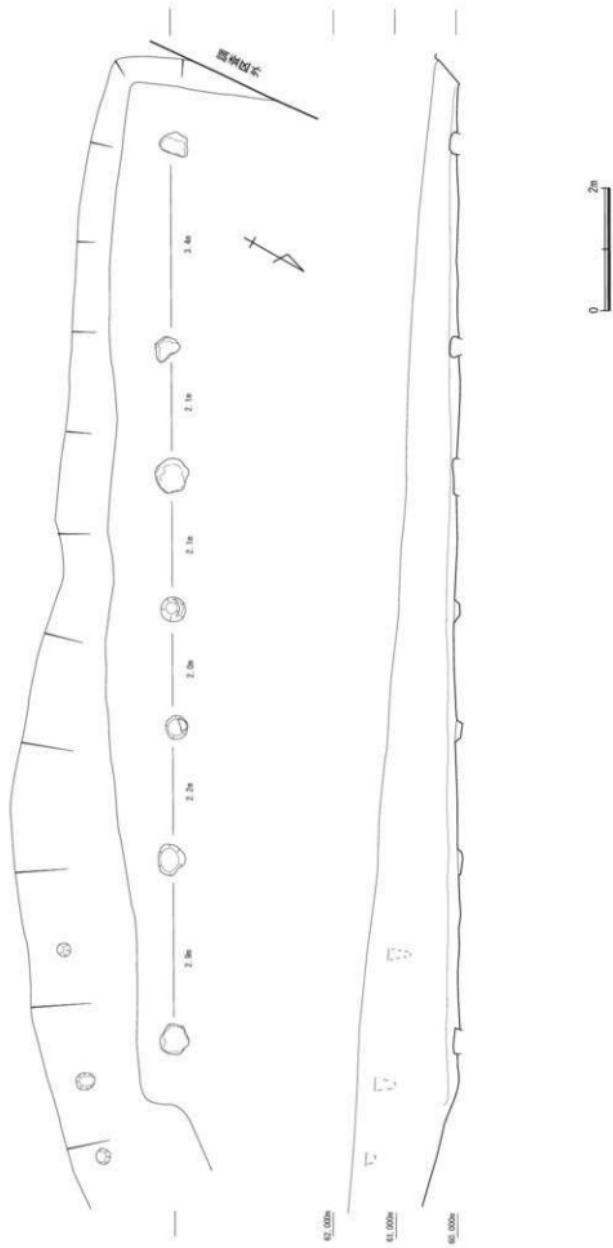
井戸 (第8図)

A区の北端で確認された井戸である。直径が1.4mほどの円形で、深さは1.5mである。土層断面を見ると、上面の1層は一括して埋め戻した土壤で、そこから上部が壁の崩壊が見られる。2層は礎を多量に含む土壤、一番下の3層は腐葉土が堆積したもので、井戸の使用時に堆積したものと考えられる。

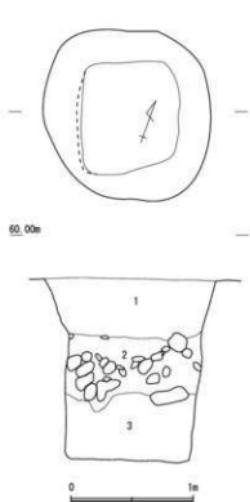
出土遺物は小型の瓦質香炉(第18図19)である。口径は12.0cmに復元できる。くの字に内側に折れる口縁部の外側に菊花の連続スタンプ文がある。浅鉢型のこのタイプは14世紀中頃には出現するとされる(『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社)。



第6図 第2焼土坑 ($S=1/40$)



第7図 基石および柱穴列 (S=1/80)



1 暗茶褐色土（一括埋土、風化土が混入、よく締まる）
2 明黄褐色土（水分含む、穢を多量に含む、遺物をわずかに含む）
3 暗灰色シルト質土（腐葉土が多量に混入、井戸使用時に堆積したものか）

第8図 井戸跡 (S=1/40)

土坑（第9図）

C区で確認されたSK2とSK3を説明する。SK2は長軸2.8m、短軸2.3～1.9mの台形状を呈し、深さは0.2mである。出土遺物は第18図36から38である。36は青磁の玉縁口縁皿で、15世紀代の年代が与えられている（亀井明徳「明代前半期陶瓷器の研究」2002）。37は口径が6.4cmの土師器小皿。38は備前焼鉢で、15世紀前半代のものである。

SK3は長軸3.5m、短軸3.2～2.7mのやや不整な隅丸の台形状を呈し、深さは0.3mである。出土遺物は第18図39から47である。39から41は土師器壺で、口径は復元で12.8cmから10.8cmと揃わず、器形も異なる。44と45の小皿も形態、大きさとも異なる。46と47は瓦器壺で、高台が消失した14世紀代のものである。

他に土坑からは、SK4から48の土師器小皿が、SK8からは土師質の銅が、SK10からは姫島産黒曜石の石鏃が出土している。

石垣（第10図）

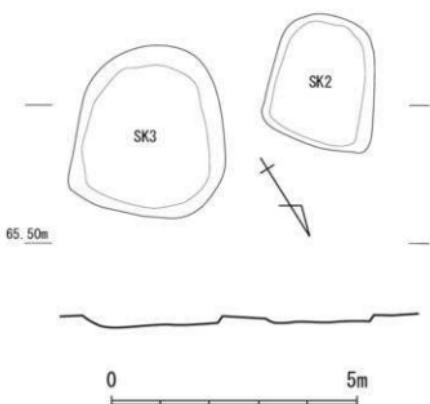
C区の南西角に石垣がある。緩やかに弧を描きながら東西に10mほど延び、西端で鈍角に折れて終わる。3段ほどの荒削の石積みで、平滑な面をのり面に貼り付けるように積んでいる。調査区内で石積みがあったのは、ここだけであった。

A区の土木工事（第11～17図）

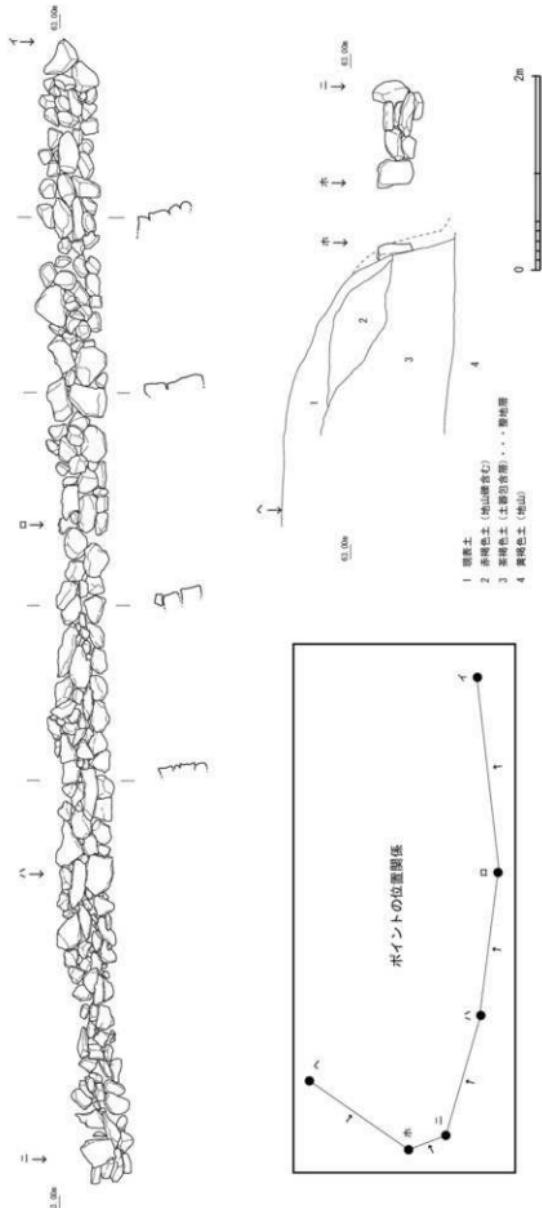
A区は調査前には平坦な畑地であったが、調査の結果、浅い谷地形を2度にわたって埋めて整地したものであることがわかった。セクション図などによってその説明を行う。

A区でセクション図を作成したのは4面である（第11図）。セクションA（第12図）は南から見た東西セクションで、中央までの作図。セクションB（第12図）は西から見た南北セクションで、中央までの作図。セクションC（第13図）は、北から見た東西セクションで、第1焼土坑を切って設定したトレーンの南壁にある。セクションD（第14図）は、西から見た南北セクションで、右側の一段高いところがB区となる。

いずれのセクションでも最下層に15層とした暗灰色土が堆積しているのがわかる。この土層中から出土した遺物が第18図20から25である。その内21から23は第15図で示すように、15層を除去した谷の底（実際に第16図セクションEに示すように、遺物を伴わないもう1層があって、その下が砾を含む地山）にほぼ接して出土している。セクションE（第16図）で分かるように、ここは地滑りと考えられる土層の不整合面がある。15層出土遺物は、20の龍泉窯青磁碗は13世紀代と考えられるが、23の瓦器壺は高台が消失したもので、14世紀中頃から後半に位置付けられる。21の壺、22の小皿は、それぞれ復元口径が10.0cmと6.8cmである。これ



第9図 C区SK2、SK3 (S=1/10)



第10図 石垣立面図 ($S = 1/50$)

らはやや新しい印象を受けるが、同じ下毛郡の本郷馬渕町（現在は中津市）古庄屋遺跡（『古庄屋遺跡』大分県教育委員会 2002）を見ると、瓦器塊に高台が付くものに伴う土師器小皿は口径が7cm以上あるが、高台が痕跡、あるいは消滅しているものに伴うものは6cm代が出現する。それから考えると、21から25は14世紀中頃から後半に位置付けられる一括資料と考えて良いだろう。

そうすると、14世紀中頃から後半には浅い谷状の地形であったものが、13層、14層、25層、28層などといった黄褐色土ブロックを含む土によって埋められ（1回目の土木工事）、その上面が腐食し、暗灰色を呈する9層が形成される。混入する黄褐色ブロックは、谷の3方の地山を削り込む、すなわち平坦面を拡幅する土木工事に伴い生じたものである可能性が高い。よって14世紀中頃から後半の直後には、大規模な土木工事が行われ、9層が表土であった時期がしばらく続いたと思われる。しかし、9層は厚さが数cmから、谷の下方で10mほどとそれほど長期にわたってオープンな状態であったとは考えられない。

そして、2回目の土木工事として、9層は1層、2層、18層から23層といった地山礫を含む土で覆われる。1回目には認められなかった地山礫を含むことから、谷の3方の掘削がより大規模に行われたことが想定される。セクションCでわかるように、谷の下方は9層のすぐ上が現表土であり、2回目の土木工事は、谷の3方を削り込むことが主体で、谷部を平坦にする意図はなかったものと考えられる。そして、その上面に第1焼土坑などの遺構が形成されている。この焼土坑から出土した遺物の時期は、前記したように15世紀に位置付けられると考えられる（古庄屋遺跡や長者屋敷官衙遺跡＜『長者屋敷遺跡』中津市教育委員会 2001＞の様相から、16世紀の早い段階で土師器小皿は口径が5cm代になる）が、厳密に時期を決めるのは難しい。土師器小皿の口径は15層出土のものと差がないが、口縁部の立ち上がりが異なり、時期差であると考える。

そうすると、14世紀の中頃から15世紀にかけての時期に、2度にわたって谷を埋め、周囲を削るという土木工事をを行っていたこととなる。

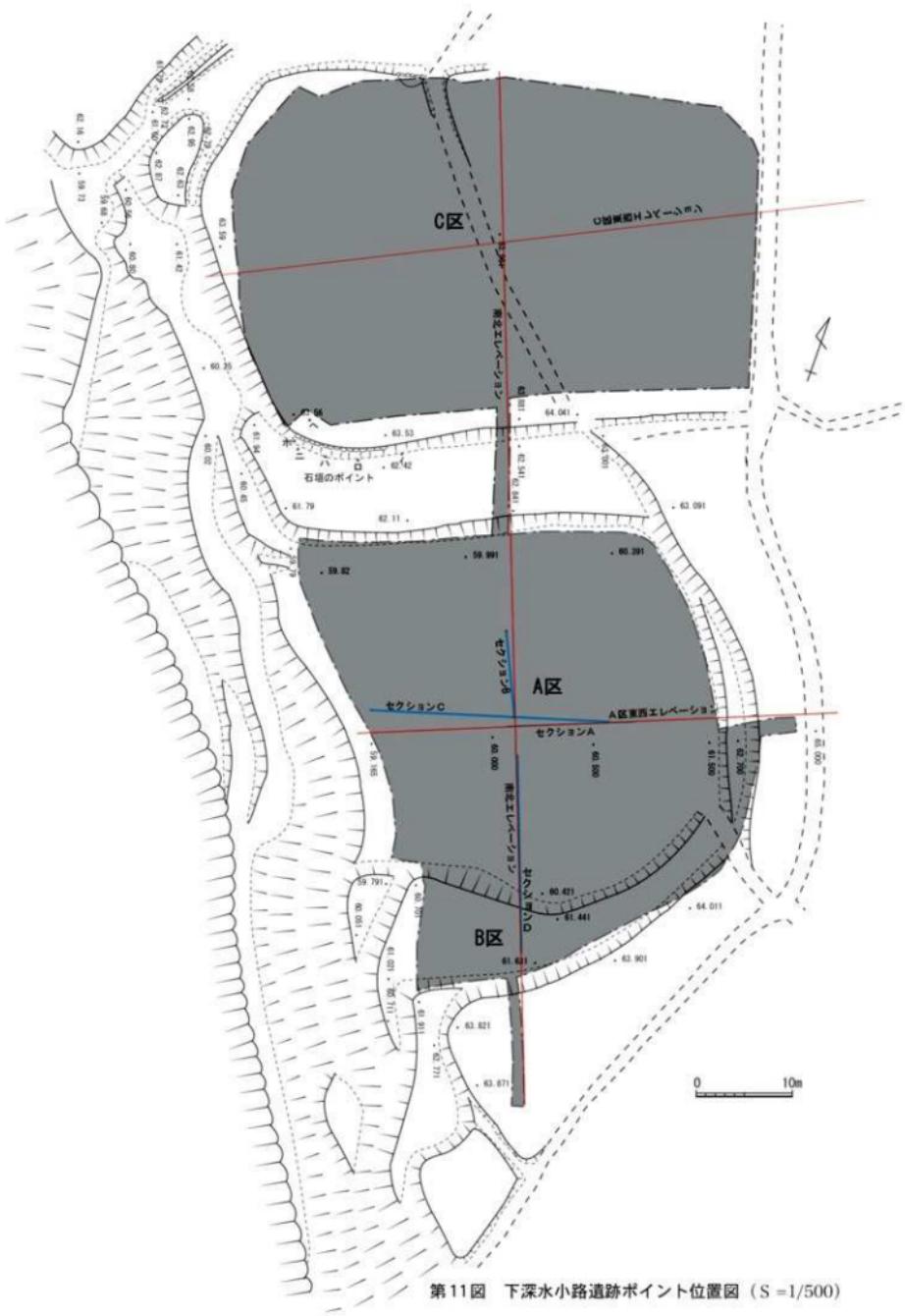
その他の出土遺物

第18図26から35はA区出土である。26は江戸時代の染付で、A区の縁をめぐる溝からの出土、27から29は鍋連弁青磁碗、30は高台の消失した瓦器塊、31は高台が付く土師質の鉢か、32は土師質の鉢である。33は土師質の鍋、34と35はそれぞれサヌカイトと姫島産黒曜石製の打製石鎌である。

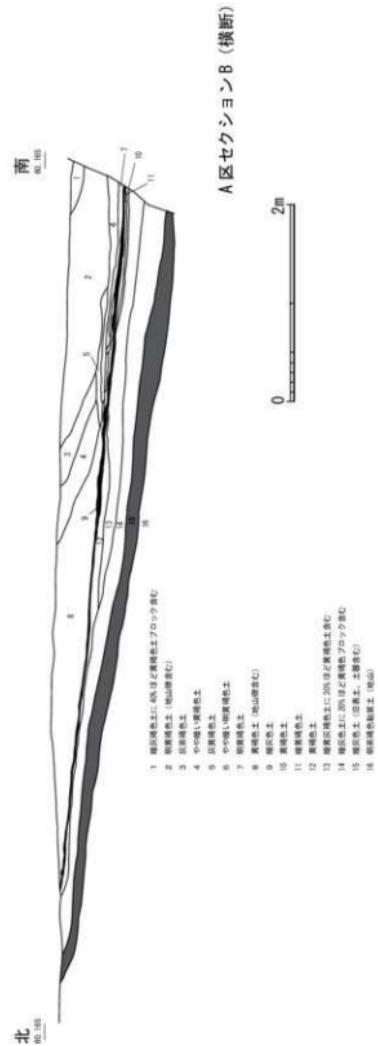
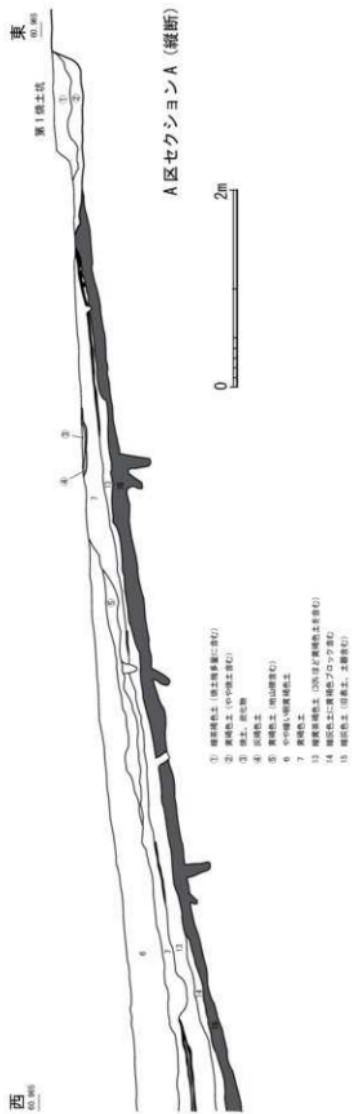
第19図51はSD2出土の土師器壺、同52から56はSD3出土で、52は土師器壺、53から55は土師器甕、56は瓦質土器の鉢の脚部である。57と58はSD4出土で、57は土師器壺、58は土甕である。59から61はSD5出土で、59は今調査唯一出土した縄文早期の先尖土器、60は土師器壺、61は土師器の甕である。

第19図62から70はC区のピットから出土したものである。62から65は土師器壺、66は高台の消失した瓦器塊、67は繩の羽口、68と69は焼土塊、70は赤間石の砥石である。71と72は須恵器甕、73は土師器壺で口径は11.5cm、74と75は土師質土器の鉢、76は土師質土器の鍋、77は瓦質土器の羽釜、78は瓦器塊、79は江戸時代の染付の火入れである。

第20図80から87は石器、および剥片である。80は腰帯系黒曜石製のトロトロ石器である。81から87は剥片。



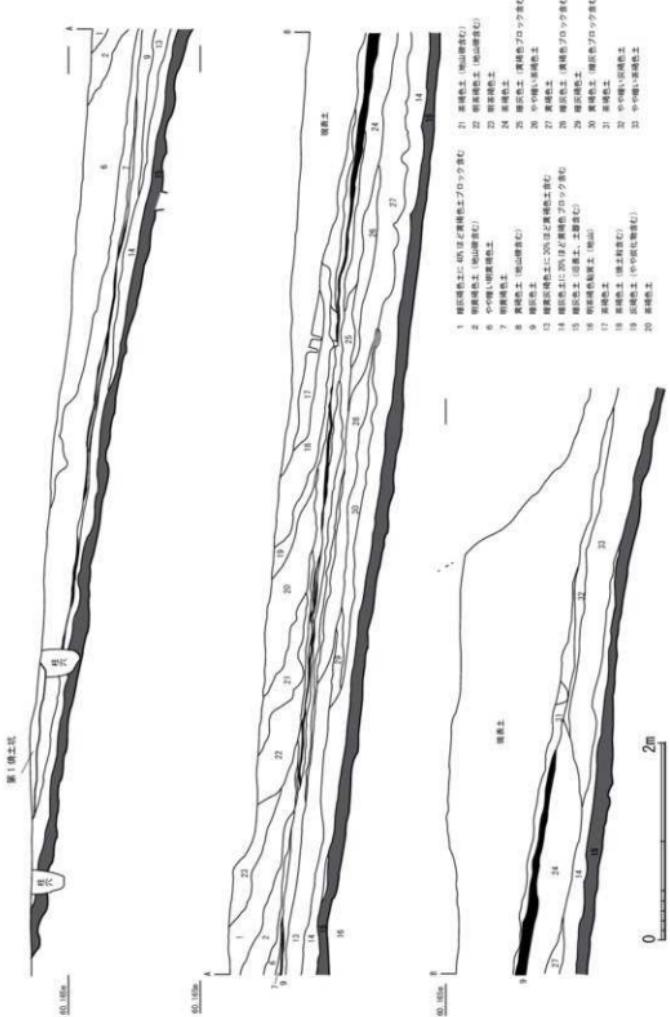
第11図 下深水小路遺跡ポイント位置図 (S = 1/500)

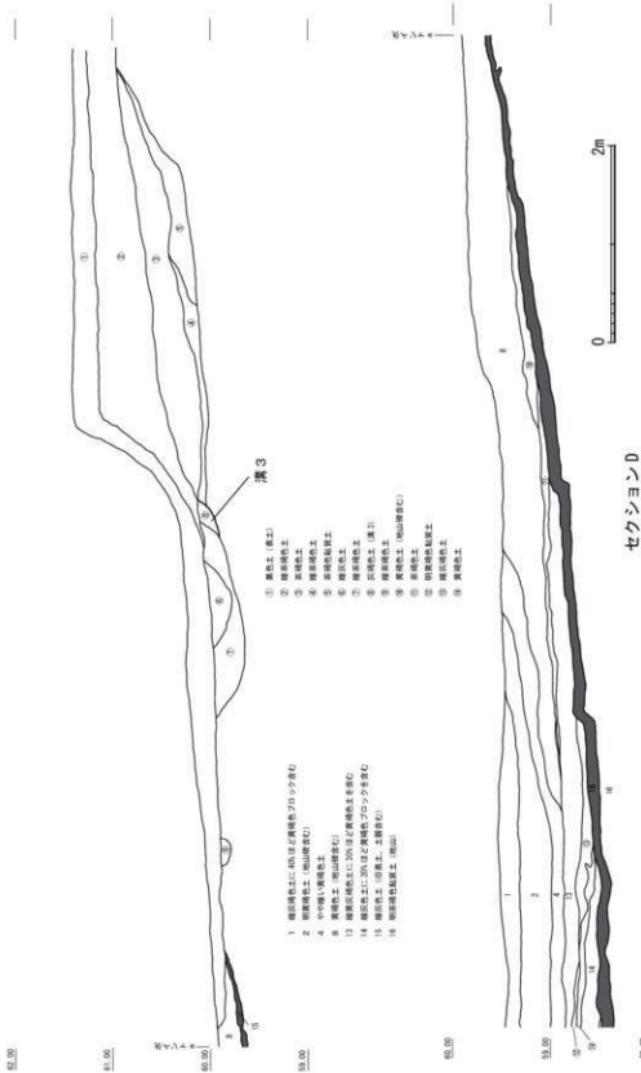


第12図 A区セクション図1 (S=1/50)

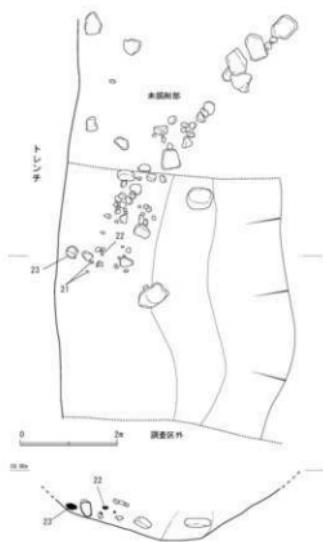
第13図 A区セクション図2 (S=1/50)

セクションC

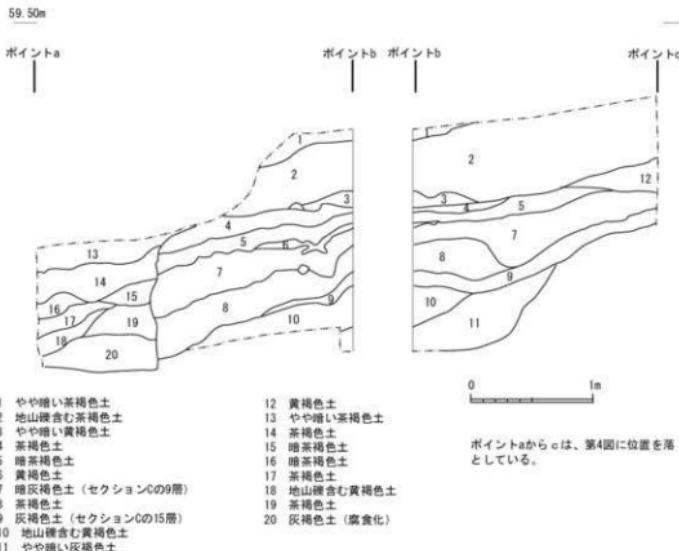




第14図 A区セクション図3 (S=1/50)



第15図 15層遺物出土状況 (S = 1/10)



第16図 A区セクション図4 (S = 1/40)



想定される自然状態の谷ライン

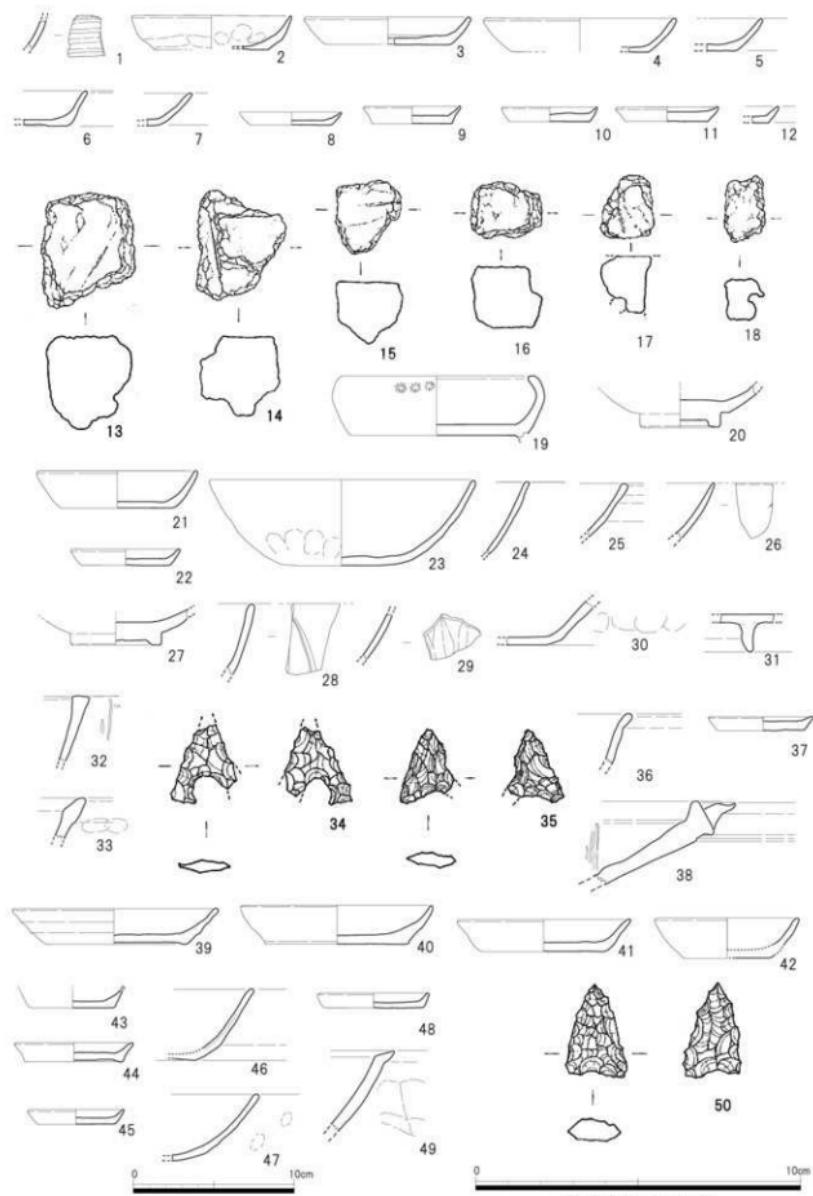
A区の南北方向、すなわち谷部を横断するエレベーションである。調査の表が写っているが他の谷の図になる。谷の中央部で約65mほど開り下がり、地山と差えられる明るい褐色土を確認している。美濃川はさら下に岩盤があり、そこが谷底となる。地山の傾斜から考へた1回目の整地面冀の谷底ラインは、地山の傾斜から考へた1回目の整地面冀以前の谷地と思定ラインである。國からわかるように、1861年の整地ではまだ谷の前面は行われず、26日以降のある箇所で、実際のように以前側面の方の距離地を作り出す大規模な削がれされたこと考えられる。削られた幅に沿つて現る崖からは近世陶磁が出土しているので、近世以前というることは言える。



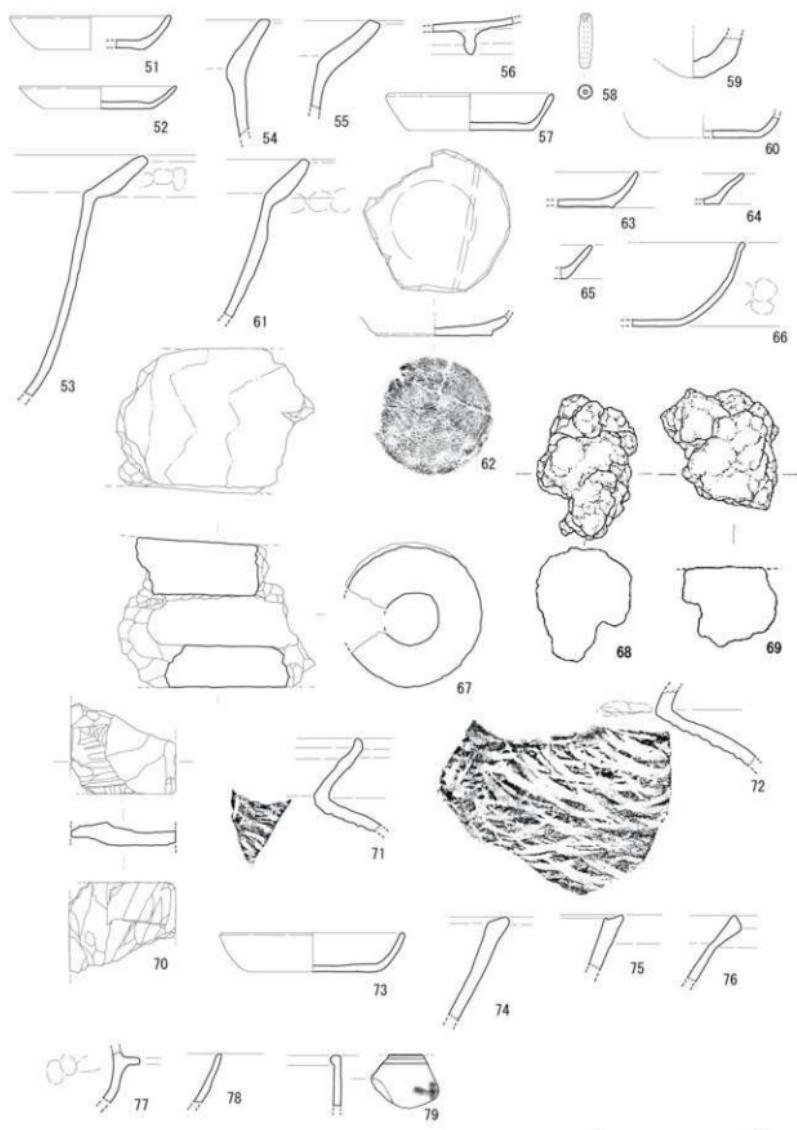
A区東西方向エレベーション



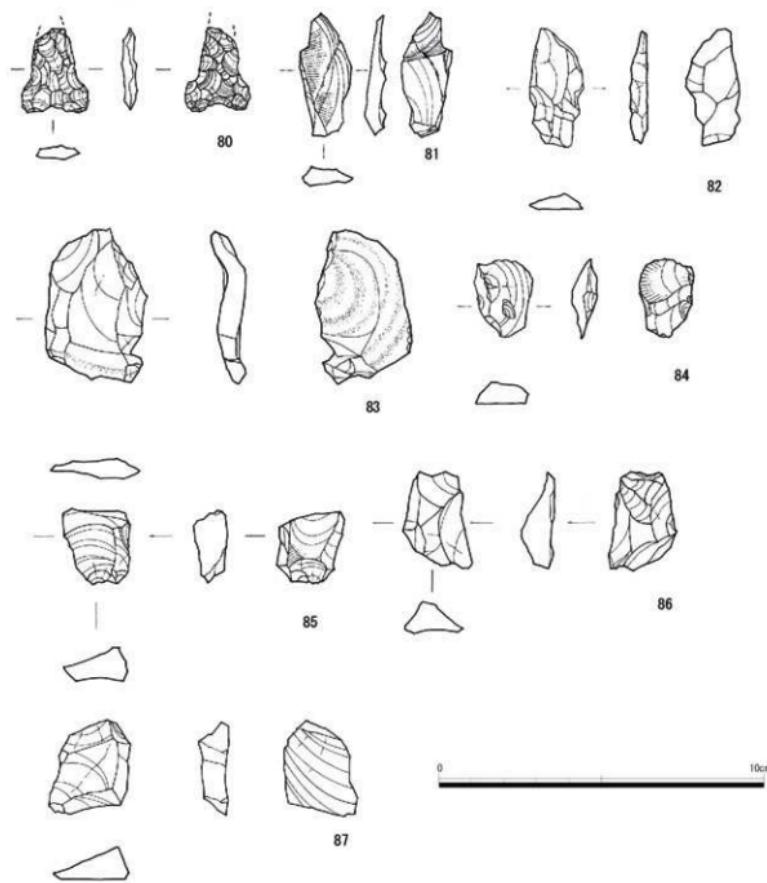
C区東西方向エレベーション



第18図 出土遺物(1) (S = 1/3, 2/3)



第19図 出土遺物(2) (S = 1/3)



第20図 出土遺物(3) (S =2/3)

第4章 総括

下深水小路遺跡は、中津市三光下深水字友岡にある（第3図参照）。この下深水地区の集落は、小字春畑、北谷を中心とする北グループと、小字小路、奥を中心とする南グループに分かれ、その間に小字土居の丘陵が横たわる。在地領主であった深水氏の居城と言われる「深水城（ズリヤネ城）」は、その丘陵上にあった（三光村教委1989）。「城」といっても一辺60～70mの単郭方形の館で、幅3～5mで深さは1.5m前後の溝が廻る（ただし南側は削平を受けている）。内部からは、掘立柱建物3棟、井戸2基などが検出されており、15世紀後半から16世紀にかけての遺物が出土している。丘陵付根側（東側）には「聖寿寺跡」とされる平坦地を挟んではば一直線の溝が南北に延び、館と寺院を隔離している。以前は、この丘陵上に「殿墓」と呼ばれる石塔群があり、現在は背後の深水家墓地に移されている（深水氏談）。

一方、ムラの部分も過去の発掘調査によっておぼろげながらその姿が浮かび上がってきた（第21図）。一連の調査で明らかになった最も古い時期の遺構は、下深水小路遺跡を少し下った谷筋に展開する南グループの深水邸納遺跡である。ここでは14世紀前半に備前焼甕に土器や鉈、鎌、斧、金輪、鉄鍋、銅錢を納めて埋置していた（三光村教委1989）。深水氏の末裔の屋敷地で偶然発見されたもので、屋敷地として開発する地鎮祭の際に埋めたものと考えられている。つまり、14世紀前半に谷筋で何らかの開発行為がなされていたのである。

続いて、今回の調査で明らかになった下深水小路遺跡の土工工事が14世紀中頃から後半以降に行われ、最終的には15世紀に焼土坑などが造られる。南グループの中でも一段高い場所で、何らかの行為がなされていたことになるが、性格は不明である。

一方、北グループのムラは、2カ所で発掘調査されている。一つはカシミ遺跡である（大分県埋文2014）。西地区からは14世紀から15世紀を中心とした掘立柱建物2棟、柵列3、溝、井戸などが確認された。つまり、居住区の一角が調査されたのであった。一方、東地区からは壁面が焼けた土坑が3基見つかっている。規模はいずれも0.4mから1m前後の円形や楕円形で、底面には薄く炭化物が堆積する。用途は不明であるが、何らかの生産に関わる遺構であろう。

このカシミ遺跡が立地するのは、明治20年代の地籍図によると「水田」の中になる。この水田は、大迫にあるため池（大迫池）灌漑によるものであることを考えれば、カシミ遺跡でその活動が確認された14世紀から15世紀には未だため池は作られていなかったことになる。むしろ、その完成がカシミ遺跡の終焉を促した可能性がある。つまり、15世紀のある段階、あるいは16世紀になって蓄池が作られたと考えることができるだろう。

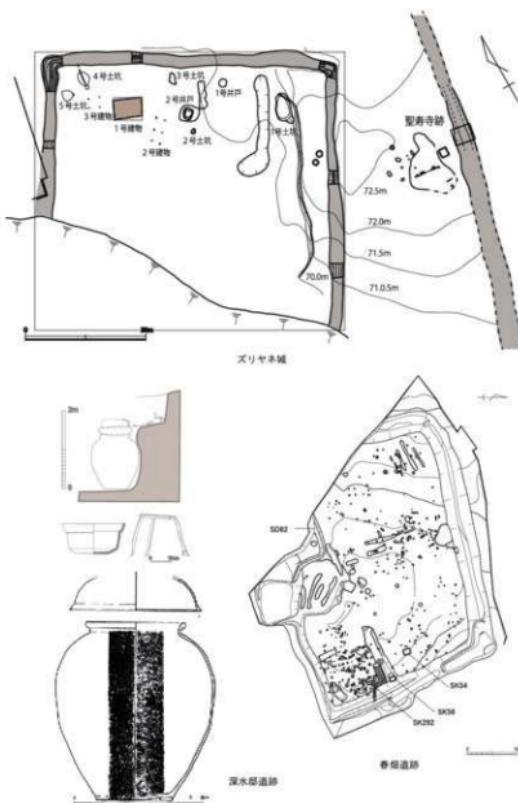
もう一つの遺跡である春畑遺跡は、調査前にも土壁が廻る屋敷区画が確認できていたが、発掘調査によって、わずかではあるが15世紀から16世紀の遺物が堀の中から検出されたことから、中世に廻るものであることが確認できた（大分県埋文2014）。地籍図によると、この春畑遺跡以外では明確な方形区画は認められてないので、春畑遺跡の居住者は北グループの中で突出した存在であったことが推測できる。この至近に15世紀後半の造立と考えられる板碑が2基建っているのも、屋敷居住者との関係を窺わせる。

では、北と南のグループの関係はどのようなものであったのだろうか。それを考えるにあたって、北と南のグループのムラ形態について見てみよう。

南グループは、集落部分の小字を「小路」という。地籍図（第3図）を見てわかるように、谷筋に東西に一本の直線的な道がとおり、その両側に屋敷区画が並んでいる。この道を「小路」と呼んだのである。あたかも計画的に配置されたように見える。

中津市内の沖代平野や下毛原と呼ばれる洪積台地上では、明治中期の地籍図の分析によると、高低差のほとんどない同一平面上で、しばしば直線的な小道に沿って方形区画が並び、そのはずれに細かな屋敷が無秩序に連なる「居屋敷」（小字で「居屋敷」と呼ばれることが多い）区域が接続する場合がある（中津市教委2022）。それらは、方形区画が発掘調査によって中世に廻ることが多いことから、方形区画（大きなものは「城屋敷」と呼ばれる）に居住する在村の支配者層と村落住人（被支配者層）が一体となった中世のムラの一つの在り方であると考えられる。ただし、大型区画を中心とした方形区画のみで構成されるものもあり、さらに中規模な方形区画に居屋敷が接続するもの、小規模な方形区画に居屋敷が接続するもの、方形区画がなく居屋敷だけで構成されるもの、といった4つにムラの形態を分けることができる（中津市教委2022）。

そうすると、下深水のムラの在り方はどのように理解できるだろうか。最大の違いは、下深水では高低差で格差が表現できることである。それが「ズリヤネ城」と呼ばれる館城である。一辺約60mと大きい（小路のムラ部分では実行きは60m近くあるが、道に接する部分の幅は20～30m程度である）のも、視覚的に優位性を誇示できたで



第21図 周辺遺跡の遺構図

あろう。そして、中津平野などで中規模な方形区画に相当する部分が、小路のムラ部分になるだろう。ムラでは現状では土塁や溝は確認できないし、明治中期の地籍図でも同様である。しかしながら、道の在り方などから考えると、土塁や溝による屋敷の区画は存在したのではないかろうか。

このように南グループを位置づけられると、一方の北グループはどのような位置づけになるであろうか。戦国期には春畠遺跡に見られるように、土塁を巡らせる屋敷も出現したが、基本的には「居屋敷」区域と考えられる。つまり、下深水のムラでは「ズリヤネ城」を最上位に、南グループ>北グループといった格差を内包していたと考えられる。

このようなムラの形成は、前記したように14世紀における備前焼窯の埋納（地鎮）や、小路遺跡の大規模な造成工事をきっかけとして始まったと考えられる。そして、それに引き続き地籍図上で見られるようなムラ形態が15世紀後半から16世紀にかけて成立したものと言えよう。

最後に、14世紀の遺跡がどのように位置づけられるかについて簡単に触れておきたい。「久恒範房軍忠状写」(大分歴博2021)によると、貞応2年(1351)正月に「株深水」の「囚徒」が高瀬(中津市高瀬)を焼き払った、とある。株氏や深水氏は、おそらく足利直冬方(佐殿方)に与し、反管領方として活動したものであろう。同じ北朝の管領方であった久恒氏や成恒氏(一時期は佐殿方)などと一緒に交え、坂手隈(中津市大字相原)まで押し返された上に「両隈城」を破却されている。「両隈城」の一つは坂手隈城と考えられるので(註)、株氏や深水氏の城郭が、管領方の強い沖代平野を見下ろす、台地端に設けられていたことがわかる。このように、14世紀の中頃は、沖代平野やその背後の下毛原において、管領方と反管領方が入り乱れ、戦乱が行われていた。この頃に下深水のムラが形成され、背後の高台において谷を埋めて平坦地を作り出すような工事を行っていたことになる。集村化を促す契機の一つが、身近に迫る戦亂に対応するためだった可能性もあるのではないかろうか。

(註) もう一つの「隈城」については確証がないが、戦国期の城郭である「岡崎城」(大字田口字城山)の先に「熊崎」という小字がある。場所から見て、熊(隈=境界)と呼ばれたのは「城山」の地であったと考えられ、ここが成恒氏の本拠地を見下ろす立地であることを考えると、もう一つの「隈城」は後の「岡崎城」の地を指すのかもしれない。

参考文献

- ・三光村教育委員会 1989『三光村の遺跡』
- ・大分県教育庁埋蔵文化財センター 2014『西株大迫遺跡・春畑遺跡・カシミ遺跡・今成館跡・木内遺跡・丸尾城跡』
- ・大分県教育庁埋蔵文化財センター 2016『諫山遺跡と周辺の遺跡』
- ・大分県立歴史博物館 2021『沖代条里の調査 本編』
- ・中津市教育委員会 2022『中津市の中近世城館 各説・総括編』

第2表 遺物觀察表



A 区南半完掘状況（北から）



A 区北半の状況



A 区遠景（C 区から）

写真図版 2



A 区北半完掘状況（東から）



A 区第1焼土坑（北から）



A 区第1焼土坑（南から）



A 区第2焼土坑



B 区礎石列



A 区井戸（半裁状態）



A 区井戸



C 区石垣



C区石垣



C区全景



C区西半部



A区谷部掘り下げ状況



A区セクションB



A区セクションB

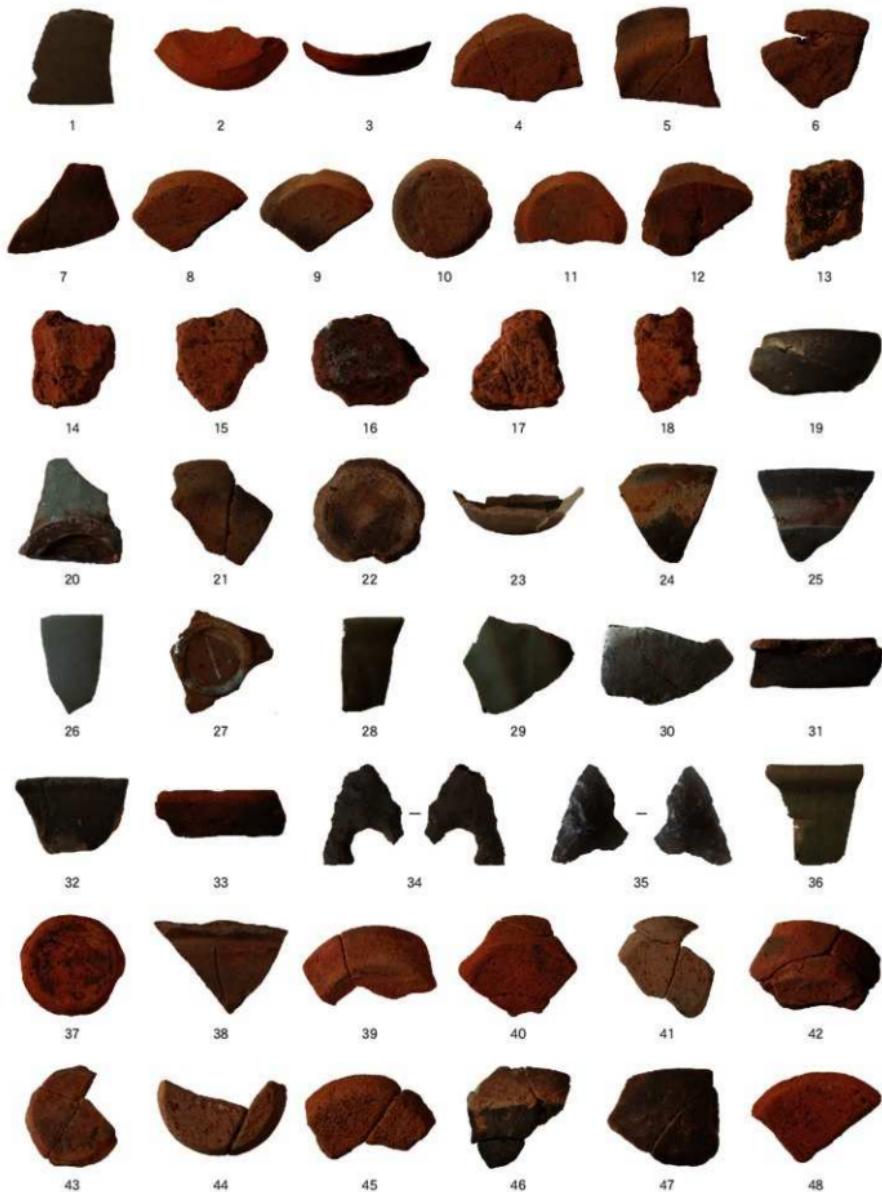


A区セクションA



A区セクションC全体

写真図版 4



出土遺物(1)



出土遺物(2)

報 告 書 抄 錄

書 名	シモ フコウズシヨウ ジ イ セキ 下深水小路遺跡						
副 書 名	村営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷 次							
シリーズ名	中津市文化財調査報告						
シリーズ番号	第118集						
編 集 者 名	小柳和宏						
編 集 機 関	中津市教育委員会						
所 在 地	〒871-8501 大分県中津市豊田町14番地3 TEL 0979-22-1111						
発 行 年 月 日	2023年3月31日						
所取遺跡名	所 在 地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面 積
下深水小路遺跡	大分県中津市 三光下深水字友岡	44203	203189	33° 31' 04"	131° 15' 16"	199710 ~ 199711	2,900m ² 村営住宅建設
所取遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
下深水小路遺跡	集落	中世	焼土坑、井戸、整地跡	土師器	14世紀の整地痕跡、15世紀の焼土坑		
要 約	14世紀と16世紀(?)の2度にわたって谷を埋め、平坦地を作り出している。その平坦面上で、何らかの焼成を伴う土坑が複数確認された。また、谷の平坦面を拡張するに伴って壊された礎石建ち建物の跡も確認された。						

下深水小路遺跡

村営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中津市文化財調査報告 第118集

令和5年3月31日

発行 中津市教育委員会
印刷 黎川原田印刷社